

5. 座右の銘

皆で楽しく和気あいあいが一番

田中明子氏の座右の銘は、「皆で楽しく和気あいあいが一番」である。初代の良太氏からは「あきちゃん」の愛称で呼ばれ、生前にこんなことを明子氏に言っていた。「あきちゃん、娘を嫁に出すとそこに行って苦労しよらせんやろか、辛い思いしよらせんかろかと親は心配するもんやから、里に行って愚痴をこぼすなよ」と。こうして田中家の家訓は良太氏の代から「里に帰ったら愚痴をこぼすな」「よそから来た者こそ大切にせないかん」となった。

明子氏は、「女は前にでるな」を厳守しながら、実家に帰ったときは絶対に愚痴はこぼさなかった。田中家の家訓を固く守った。無理をして守ったわけではない。だからこそ、箱崎家から田中家へ嫁に来たよそ者の明子氏は、田中家の皆から大切にされた。義理の母・初音氏も良太氏の考えに倣^{なら}い、嫁である明子氏を大事にした。明子氏の言葉を借りると、「二十歳で嫁いで、義父・義母とも『よそから来た者こそ大切に^{なら}してやらな』という気持ちでわたしを迎えてくれたことをおもうと、穏やかに平和にせないかん、そうなるように努力せないかんとおもって、嫁いでの60年を過ごしてきました。」

もちろん、二代目の嫁として悩んだことも多々あるが、つねに「皆で楽しく和気あいあいが一番」をモットーに明るく振る舞ってきた。天性の明るさも手伝って、明子氏の周りはずっと笑顔が絶えなかった。けっして前に出ることはなかったけれど、田中産業が隆盛を誇っていたときも苦境に立たされたときも明子氏は近くでその様子を見守ってきた。今振り返ると、とにかく平和で過ぎたことを感謝する毎日である。

普通にやって普通に食べていけること、これがすべて

一方、愛子氏は、「座右の銘はない」と言うが、胸に秘めたるものは伝わってくる。田中産業の盛衰を近くで見てきて、また東洋繊維協同組合の命運を握る立場にあって、「東洋繊維と田中産業で食べていけることが幸せ」であり、「それを次の世代に継承していくこと」を使命としている。「普通にやって普通に食べていける、これがすべて」と静かに微笑む。



1932年に良太氏がタオル工場を起こし、1951年には染晒加工業を内部化し、良太氏を先頭に家族・同族で協力しながら事業を大きくしてきた。田中産業を母体とする同族企業は、戦前から今治地域のタオル工業の発展に寄与し、戦後は今治を代表するタオル製造業者に成長した。しかし、順風満帆だった経営は、かつてレジャー事業（ボーリング事業）への多角化に失敗し、田中産業と東洋繊維協同組合の経営を圧迫して一時は危ない状況に陥ったことがある。同族企業として、なんとか全員の努力でそれを乗り切ったが、この苦い経験が愛子氏をはじめ田中家の人びとにある教訓を与えている。

「全員の努力と運と、いろいろなものがあって、今わたしたちが生きているんだとおもうんです。どんな商売でも商売していたら、良いときもあれば悪いときもありますから。普通にやって普通に食べていける、これがすべてです。晒し場とタオル屋を次の代に引き継いでいけたら、それで普通に人生が送れたら、それは幸せというものだろうとおもいます。商売は自分の努力だけではうまくいかんときもありますから、続けられるということだけで幸せなことだろうと思いますね」と、会社の盛衰を身近に見てきた愛子氏はしみじみ言う。

もし田中産業がレジャー事業に失敗していなければ、日本一のタオルメーカーに成長していただろう。今考えると、1966年の昭和天皇行幸のときが田中産業の最盛期であったが、そんな時代も含めてこうして現在も事業を続けていられることに母と娘は感謝する。陰ながら家族や従業員を支え続けた母の明子氏に対して、愛子氏は

「母が短大に進学したことは私にとって誇りであり自信」であると言う。それは、明子氏のキャリアが愛子氏の自信になっているからである。愛子氏が組織のリーダーとして踏んばれるのも、母が側にいて応援してくれるからである。

6. 愛読書

明子氏の愛読書は、学生時代に繰り返し読んだマーガレット・ミッチェル  の『風と共に去りぬ』と谷崎潤一郎  の『細雪』である。いずれも女性たちが主人公の小説であり、若かりし頃の明子氏は自分と重ねながら読書に耽っていた。

1936年にアメリカで刊行された『風と共に去りぬ』は、南北戦争時代の北部アメリカを舞台に奴隷解放以前の白人社会を描いたものである。主人公のスカーレット・オハラは美しく強い意思を持った女性として描かれ、戦前の多くの女性たちにとって憧れの存在だった。1939年には映画化もされ、スカーレット・オハラを演じたビビアン・リーはたくさんのファンをこの映画をとおして獲得した。

1943年に『中央公論』に初めて掲載された『細雪』は、大阪の船場に暖簾をかまえる蒔岡家の4人姉妹の物語である。三女の縁談話を中心に物語は進んでいくが、戦前の船場文化を背景にしながら4人の人物をとおしてその崩壊過程を谷崎は描いている。1950年の映画化を皮切りに何度もリメイクされ、日本を代表する女優たちが演じてきたこともあり、谷崎を代表する作品となっている。



マーガレット・ミッチェル、大久保康雄他訳『風と共に去りぬ』新潮社、1993年（今治市立図書館所蔵）。



谷崎潤一郎『細雪』上中下巻、新潮文庫、1955年（今治市立図書館所蔵）。

そして現在、明子氏は、読書というより、コーラスと歌舞伎鑑賞が趣味である。コーラスは高校生のときに始めたのが最初であるが、年齢を重ね50歳になってから再開した。それ以来、毎月4回の練習は欠かせない。歌舞伎は短大時代の友人と定期的に鑑賞に出かけ、子供時代に日本舞踊と琴を習っていたおかげで、歌舞伎を見ては役者の舞いに酔いしれる。

愛子氏も読書というより、日本文化に造形が深いだけあって、歌舞伎と茶道が趣味である。歌舞伎については、大学卒業後その面白さの虜になり、仕事の合間をぬって年に一度顔見世に必ず足を運ぶ。

茶道は、明子氏の強い薦めもあって26歳のときに今治市内の茶道の先生に付いて習いはじめた。愛子氏的意思から始めたわけではなく、明子氏があまりにも何度も茶道を習うように言うので、辞めるために習い始めたと言った方が正鵠^{せいこく}を射ている。一日で辞める予定だったが、茶道の先生の人柄の良さで辞めるきっかけを失くしてしまい、以来茶道の先生が引退されたほんの2年前まで20年以上も続けた。愛子氏の立ち居振る舞いに、日本の侘び寂び文化が染み付いているのは、そのせいでもある。今は晒し場の仕事が忙しく、趣味からは久しく遠のいているが、仕事を引退したら学生時代やっていた弓道をまずは復活させたいとおもっている。

どんな環境に生まれ、どんな環境のもとに身を置いたかによって習い事も趣味も変わる。そんな話をしているうちに、武智スマ氏の話になった(武智氏については「タオルびと」2015年4月号～7月号を参照)。おなじ今治にいておなじ女性として生まれても人生いろいろであり、明子氏とほぼ同世代の武智氏はタオル屋にどっぷり漬かり、いまだ現役である。タオル業界でおなじ釜の飯を食うようになった愛子氏は、そんな武智氏を尊敬する。「武智さんはその時点で何が一番大事かをいつも考えていますね。たとえば、うちが加工で失敗したとしてもそれをその場で責めるんじゃないかと、どうやらないかんかを考えています。くどくど言わない。こちらの失敗だったとしても、言い分も聞いてくれる。偉いなぁとおもいます。情に

篤くて、わたしは尊敬しています。」

今治の「タオルびと」には頼もしい女性たちがたくさんいる。だから、MADE IN IMABARI のタオルが厳しい環境のなかでも元気なのである。(完)

(文責・インタビュー： 辻智佐子)



参考文献

「染工場、採算悪化に悲鳴 ブラックが消える？ 黒など濃色染料高騰」[2014]「繊維ニュース」2014年7月7日。

楫西光速編『現代日本産業発達史 XI 繊維上』、現代日本産業発達史研究会、1964年。

編集後記

2015年夏、立秋(8月8日)の日に旭町にある晒し場の工場を愛子さんに案内してもらい、翌日ご自宅でお二人にインタビューの運びとなりました。「タオルびと」では初の二人同時掲載となった記念すべき号となりました。

唐突ですが、お二人を表す漢字を3つずつ並べてみたいと思います。明子さんは「明・動・華」。愛子さんは「凜・静・雅」。明子さんは、裕福な商家育ちで天性の天真爛漫さと華やかさを持ち合わせています。昔は日舞、いまはコーラスに歌舞伎鑑賞と、つねに明るく活動的な女性です。一方の愛子さんは、凜とした落ち着いた着きのある女性として目に映りました。凜とした静穏さから湧き出る情熱は伝わってきますが、それを感じさせない立ち居振る舞いは雅さを漂わせるものでした。長時間に渡るインタビューとなりましたが、疲れた表情ひとつ見せないお二人に共通していたのは、ステキな笑顔でした。

(辻)

次回の「タオルびと」

次回の「タオルびと」は、大和染工(株)の代表取締役社長である青野茂則氏である。同社も東洋繊維協同組合と同様に、今治タオルの染晒加工部門でタオル業界の発展を支えている。青野氏は今治のエジソンと称すべき発明家・技術者であり、その功績は染晒加工部門を超えてタオル業界全体に影響を及ぼしている。そんな青野氏の人となりに迫る。

